

# 絵はがきの時代

細馬宏通著



透かし絵はがきを二存  
じだろつか。例えば五月  
晴れのバリのオペラ座の  
絵柄がある。それを暗闇  
でろうそくの光にかざ

始の年賀状元旦配達と、  
日露戦争下での絵はがき  
需要の劇的増大が見逃せ  
ない。

漱石の小説「三四郎」

す。すると場面はにわか  
に夜景に転ずる。月明か  
りの雲間の下、歌劇場の  
窓には照明がともる。透

(明治四十一年新聞掲載)  
で、なぜ美禰子は封書で  
はなく、絵はがきを三四  
郎によこすのか。封書は

から振り返る。著者のま  
なごしは、好事家の感溺  
(わくでき)とは一線を  
画す。縦糸は、立体写真  
やセルロイド製品など、  
この時代に産み落とされ  
た特異な証拠物件。横糸  
は山岳観光史や万国博覧  
会、東京大水害の記録、  
マニアむけ専門誌の盛衰  
から印刷技術史に至る。

## 技術革新下の世相を浮き彫り

かし絵の発達は、欧州高  
緯度地帯ならではの、長  
き薄暮の産物だったので  
はないか。そう著者は自  
問する。

手紙の秘密を封印する。  
反対にはがきは、隠すべ  
き秘密などないことを、  
あけすけに第三者に公言  
する。そしてひとり受取

時代を描きとめつつ時  
代を漂流し、欧州の古本  
屋に漂着した末、筆者が  
救出した異国の挿絵入り  
郵便物たち。日本製を含  
むこれらの遺留品たち

江戸時代後期の日本に  
舶来された眼鏡絵にも、  
「透かし」技法は知られ  
る。この技法が、二十世  
紀初頭には、絵はがき版  
にまで圧縮され、転生を  
果たしたことになる。

人だけは、謎に直面する。  
それがほかならぬ「迷へ  
る子羊」の謎。「露悪家」  
美禰子を造形するための  
最良の小道具こそ、見事  
に「不用意」な、この近

郵便物たち。日本製を含  
むこれらの遺留品たち  
は、残る筆跡や画鋏(がび  
よう)穴に、かろうじて世  
界遍歴の痕跡を留めるば  
かり。だが人は、そこに  
隠された来歴を発掘する  
誘惑から逃れられない。

時代は折から絵はがき  
全盛期を迎えていた。そ  
の背景には、欧米各国で

た、と著者はみる。  
本書は、絵はがきの黄  
金時代を、百年後の今日

(稲賀繁美・国際日本文  
化研究センター教授)  
青土社・二二二〇円